慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「近世画家論」第二巻より「建築の七灯」に至る迄（一）ジョン・ラスキン伝続稿の一片
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.1 (1924. 1) ,p.79- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240110-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

謹んで復興の新年を賀す

本年も不相變御用命願上ます

三田豐國銀行横町

佐藤洋服店

雜錄

「近世畫家論」第二卷より「建築の七燈」に至る迄（一）

ジョン・ラスキン傳續稿の一片

奥井復太郎

本誌第十七卷の第一號より第六號に亙りて連載せる拙稿『社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯』は完結を見ずして一時擱筆したり。本稿は其續篇にして即ち前稿に於いては一八四三年その第一卷を出せる「近世畫家論」と其後一八四五年彼が伊太利旅行を企つるに至れる經過を敍述して止めたり、從つて本稿は一八四五年の旅行より説起すものにして、其の主題は「近世畫家論」第二卷に於ける美の教義より轉じてラスキンが社會生活の批評に移れる一過程たる彼の建築論に及ぼさんとするものなり。故に本稿の表題は少しく妥當ならざる點あるも（即ちラスキン主著の解説批評に非ざるが故に）彼の主るラスキンの思想的經過を確むるに於いて必要なるが故に、一時的便宜によりてかく名付けたのである。廣汎なる彼の諸大著に就いて直接その中の思想見解を汲むは今日の所企及し得ざる所なり。表題に就いて誤解の恐あれば特に讀者の了解を乞ふものなり。

一

一八四五年の伊太利旅行は大陸に於けるラスキンの最初の獨り旅である。常に彼は其の兩親に伴はれてゐた。故に兩親の懸念は彼の隨行者としてラスキンの下婢の兄にあたるジョン・ホップス（ヂョーヂと呼ばれてゐる）と旅行の案内者であり又「哲學者」であり、ラスキンの友でもあり更に實際的の醫師でもあつた、ラスキンによつて pro-papa と呼ばれてゐる Joseph Couttet を撰び付した。從つてラスキンは旅行先きより兩親に宛て丶殆ど毎日手紙を認めてゐる、此年の旅行に就いて日誌の記錄なき以上是等の手紙は

兩親の心配の強さを語る以上に極めて重要なる資料である。又彼が携帶せる澤山のノートブックは繪畫並びに美術品の記錄を以つて塡められ其等の資料より Murray の Handbook for Travellers in North Italy 第三版に於ける諸種の美術に關する註釋が寄稿せられた。

併し最も大なる影響と見る可きはラスキンが此旅行に於いて初めて得た美術上――彫刻繪畫建築――の眞の知識である。

一八四五年四月二日に出發したラスキン一行の先づ目ざした地は Lucca であつた。此地こそ四五年の旅行をして最も意義あらしめた所で十日間の滯在期はラスキンの語る所によれば四十年の永きを生み出したのである、此地に興趣を感じて盡くる所なき彼は一時間の逍遙に十二ヶ月間の勞作を必要とする仕事を見出した。更に彼は此地で『San の Michele の象眼建築と Fra Bartolomeo の作である Siena の St. Catherine と一緒にある Magdalen の繪と、Quercia の手になる Ilaria di Caretto の像』との三者に極めて重大なる意義と其の理解力に於ける彼の知識的發展とを認めた。ラスキンが自叙傳に語る所を覩へば次の如くである。

『私がよりよき知識を得る以前に十年の歲月は過ぎ去つた。Rheims の車寄に立てる時と Ilaria の墓の傍に立てる時との間の毎日は私の上によき方への刻みをつけて行つた。Fontainebleau の時代からの訓練は今日迄緊張せるものであつた、樹の枝、生長せる木葉、前景の草叢等の正確なる研究は益々私に亂暴なる線と優雅なる線との相違を充分に敎へた。Clotilde 及 Cécile の、純然たる佛蘭西式ゴシックの、又 Araceli の生ける Egeria 等の美は私の精神や心胸に美術の理想としてのみならず、神聖なる實在として、活々せる女性の最も純潔なる模範と寫つてゐた而して茲に突然、廢れる Ilaria の中に、是等の模範の完全なるものが、私の直に認め得た樣に、河波やアスペンの枝や星の出沒等と同一法則の下にある線の調和と共に表現せられ、併し德性の光によつて自然の法則を讀む所の謙讓と嚴肅とを以て取扱はれた、完全なるものが其の中に存した。』

之れを以つて彼ラスキンは最早彼の生涯を單に岩石や雲の研究にのみ費す可きでないと悟つた。更に San Michele の建築は彼をして稱讃と吃驚とを以つて呆然たらしめたものである。

『之れ迄ミランの美しく仕上げられたるものを除いては、あらゆる建築は其の半ば頽廢せる所に自分の興味を起し得たのであつた。私は其の時代のセンチメントを尊敬し、狹間飾の腐朽したる所や其の石造建築の石の間の裂目などに時代徵を注意するのに慣れてゐた。此の罅隙や目地を注意する事は粗雜なる石そのものに對する、又ウエストモアランドのコテエイジの樣に建てられた田舍の敎會なぞに對する愛着と混合されてゐた。然るに此のルカに於いては何等漆喰なくして立派に出來上つてゐる石工の立派なる權衡と、又日光や雨の六百年の後に一つの披針さへその接目の間に入れる事の出來ぬ程腐蝕せざる材料等で初めから造られた十一世紀の諸建築の存在を見出した。

此時全く始めて私は、中世の建築家とはどんなものであつたか、彼等は何を意味するかを知つた。私は分析的研究の爲めに最も簡單な façade 即ち Santa Maria Foris-Portam を

撰んだ、そしてそれに就いて文字通りに建築の研究を始めた。』

更に Fra Bartolomeo の Magdalen の繪は、深い色彩と調子に於ける「眞」に就いてラスキンが初めて見た聖畫であつて、繪そのものゝ獨創的の力よりも寧ろ偉大なる伊太利の宗教美術の原理を包括せるものであつた。誠に其は『純なるカソリックの傳統が繪畫の完全なる流派の手によつて取扱はれたる無瑕の例證』をラスキンに示したのであつた。

故にラスキンは此時を以つて以上三つの藝術に關する根本的原理を把握し得た時であるとなす。

『今は私は此の三大藝術の原理に關して之れ以上の學問を必要としない。一八四五年の此夏の日以後と云ふものは、私は、個々の特性、地方的感情、構成や遂行の詳細等の知識に於いて進歩した丈けである。先づ正しくして終局に最善なるものに就いては何等疑ふ餘地はなかつた。私の美術に關する教は必然多くの地方的、個人的關係に偏した所はあらうが、此時以來全く堅實であり年々より明白なる完成へと進歩して行つたのである。』

彼の歡喜と幸福とは常に刻苦して働き其の平和と健康とを保持せる者にのみ理解せられ得る性質のものであつた。蓋し『世界は今や誠に正しきものとして私に映じた。丘陵の高き、河水の廣き、繪畫の美しき、師父並びに人々の賢明なる――能ふ限り美にして賢なる――其は彼等が在る可きが儘にありて然か、あるのである』彼はかくて「近世畫家論」第二卷を出版しうるや同時に人々をして彼の見解に同せしめうるを豫期しつゝ莊重なる希望と矜との中に Pisa へ向つた。

Pisa に於ける Camp Santo がラスキンに教へたる所は、本來の基督教教義を卒直に純眞に繪畫に現はして示したものである。

『其處には羅馬教的又は非羅馬教的の教義も無ければ宗派とか宗門とかの問題は寸毫も存しない。其處には國王あり僧正あり騎士あり隱者がある、併し其は市會議員や技師等を以て十九世紀の所產を描くが如く、其當時の畫家が彼等を觀、彼等を其儘に畫がいたのである。併し當時の畫家は、今日吾々が、彼は財產を造り、又はトンネルを造れりとの理由によつて考ふるが如くに、法冠を頂き、ヘルメットを頂けるが故に彼は此世又は來世に於いて全く幸福なるべしとは想はなかつた。……

其は私に族長的生活を示すと共に初期の聖典が云はんと欲する所のものを示し、更に現在の基督教的傳統の下に於いて、私が思想並びに生活上取扱はねばならぬ問題を眞直な、不可避の光の下に置いてくれたのである。』

併しラスキンのピサに於ける勞作は單なる思想的方面にのみ限られなかつた。彼は其地に於ける壁畫の荒廢の著しきを嘆じ未だ悉く滅失せざる內に其の複製を殘すべく、大規模なる模寫に着手した。斯くして彼はルカに於けるが如く又多忙なる生活をピサに送つた。

ラスキンはピサより轉じてフロオレンスに赴いた、此地に於ける感激もラスキンのルカに於いて得し所のものを增大するに役立つた。即ち六月四日に父に宛てたる彼の手紙は如何に研究事物に豐富なるかを語つてゐる。二ヶ月間の滯在中の彼の勞作は主として Stanta Maria Novella の後陣に於ける Ghirlandajo. Brancacci Chapel に於ける Angelico 等の作品に傾注され Giotto に對する初めての研究も行はれた。併し是等の

連續せる勉强とフロオレンスの强烈なる暑夏とはラスキンの身體に可なり强い打擊を與へたので是等の地に於ける藝術の一應の知識を得ると共に北部の涼しい山岳地方へと引き移る事に決し Val Anzasca の地方で彼自身の仕事を企てながら初秋を其處に過した。その地がラスキンにとつて如何なる慰安を與ふるやについては次の手紙の一片程それをよく語つてゐるものは外にない。

"Here I am at last in my *own* country-great luxury and rejoicing—out of the way of everybody—out of Italian smells and vileness, everything pure and bright." (to his mother, from Macugnaga, Val Auzasca, Thuesday, 24th, July 1845)

寂莫なる Macugnaga に於けるラスキンの日々は彼の旅囊の中に收められたるシェクスピアによつて慰められた。此注意深い讀書は以前には疑問を起させないメロディーとして響いてゐた言葉の中により完全なる眞理、より深遠なる熱情の潛めるを發見せしめた。同時に「從來單に美術家的或ひは博物學者的生活から得てゐた受動的感覺を脫して成果にとめる思想」に彼を轉ぜしめた研究である、故に、

『其時から後、眞面目なる讀書は殆ど全部私が外國に居る時に行はれた。馬車箱に積み込まれる非常に重い箱は常に辭書でいつぱいであつた。デンマーク・ヒルの私の生活は吾々のタアナアの藏品を見に來る人々に同じ事を反覆して語る限り無い時間潰しと共に、著作や印刷稿正等の苦役に變じてしまつた』

併しラスキンにとつて最も重要な意義を有せる一八四五年の旅行は之れが終りではなかつた、彼が「近世畫家論」第二卷のエピローグに述べてゐる所を讀めば明かに運命が重大なる轉換を彼に示したのである。

"And very solemnly I wish that I had gone straight home that summer, and never seen Venice, or Tintoret! Perhaps I might have been the Catholic Archbishop of York, by this time—who know! building my cathedral there, in emulation of the Cardinal's at Westminster—instead of a tiny sheffield museum." (1883)

運命と著述と云ふ不幸なる仕事は異つた方面を示した。「近世畫家論」は敎會史の研究で終るものではないので、既にのべた樣に彼はフロオレンスを去つて北部山地に赴き彼の專門の仕事に從つたのである。

Macugnaga を離れたラスキンは一八三八年タアナアの delight works の寫生地を探つた、然かるに丁度此時彼の水彩畫の師であつた J.D. Harding からの書面によつて寫生旅行の同行を勸誘され Baveno に於いて彼と一緒になるや Como, Verona を經て遂にヴェニスに到つたのである。

ヴェニスに於いて運命がラスキンの爲めに待てるものはチントレットの啓示であつた。Sta. Maria dell' Orte の敎會に於いて既にチントレットの畫風を見、他のヴェネチアン・マスタア等の彼に追隨し得ざるを知つたラスキンは Scuola di San Rocco のチントレットを見るに及んで益々其の偉大を悟ると共に未だ世に出でざる古巨匠を英國に紹介するの動機が構成せられたのである。此のチントレットの啓示に就いて彼は次の樣に語つてゐる。

『吾々がアッバア・ギャレリーを通り拔けて「耶蘇磔像」の部屋に入るや二人はペタリと坐つ

てしまつて、其の繪ではなくお互に顏と顏とを見合せる許りであつた――文字通りに吾々は立ち得なかつた程力を拔かれてしまつたのだ。

『其處を去つたときハアヂングは學童が鞭打たれたのと同じ樣に感じたと云つた。併し私は……たゞ新しい世界が私の爲めに開かれたのを感ずると共に、此日初めて「人間の美術」を其完全なる尊嚴の內に認め得たるを感じ、更に其を認めるを得せしめた所の力、即ち私を威壓してしまはないで、私を高めしめた所の、不思議な又貴重なる力が私に授けられてゐるのを悟つた。此の解說者としての私自身の力と職分との感は私が年をとつて行くに從つて强くなつて行つた……』

之れこそ少くともラスキンの自から認めて天職又は天才と爲すところのものである。斯くの如き心境にあつたラスキンはハアヂングと別れた後もヴェニスに留まつた其研究に耽つてゐたが再び健康に異常を生じたので匆々旅裝をとゝのへて歸途についた。然かるに此の歸途はその健康の爲めか、知識の向上に伴ふ內心の不安の爲めか、ラスキンを非常に重苦しい沈鬱の中に閉じた。ラスキンが眞面目なる心からの祈禱を爲したのは此の時の事である。その祈禱に對して彼は祈に對する神の御答の如きものを感じ、幾分か其の元氣を恢復し得た、然しその貴き交感も次第に薄れて辛じて無事歸宅し得た頃には再び下界の沮喪と暗黑の裡に陷込まんとしてゐたのである。

斯くして、十一月四日を以つて一八四五年の意義ありし旅行は終つた、彼は次で其の著述を續行しなければならなかつた、一八四三年第一卷を現はして以後常に計畫し繼續してゐた「近世畫家論」の第二卷は漸く世に公にせられた所の形態を構成するに至つたのである、故に一八四六年に現はれた同書はクックの云ふ如く或は三年の歲月を經たるもの云ふを得べく或は六ケ月間の勞作によつて完成せられたりを云ひ得るのである。

二

一八四五年十一月の初めにデムマアク・ヒルに歸來せるラスキンは直に其の仕事に着手し始めた。斯くて約六ケ月を經た一八四六年四月二十四日に『近世畫家論』の第二卷は出版された。第一卷の終了後、三年間の年月に彼が豐かに集め得たる新知識は斯くして、イムピイリアル・オクタヴォ版本文二百十七頁の中に盛られた。著述中の感情に就いては次の如く云ふ。

『一八四五年の冬、牧場と二匹の牝牛とを眺めわたす。デムマアク・ヒルの新書齋に於いて私は、父が最早何等の申譯をせずに直に着手する事を豫期してゐた樣に「近世畫家論」の第二卷の執筆にとり掛つた。

『私が此の第二卷を計畫した時の宗敎的氣分を定義する事は極めて困難であるが又其を說明する事は更に困難である。今日私が、神の公正、人間の尊貴、自然の美觀に就いて知覺せる所のものは、同じ樣に强く其の當時にあつて覺り感じてゐたのである。たゞ是等の確乎たる信念も、私が敎へられ來た敎理の誤謬と制限、そを說く者の愚と矛盾等を日々斷えず發見する事によつて混亂せられてゐた。』

併し「近世畫家論」の第二章は其の內容に於いてラスキンの敎義の全體系の中心とせられてゐ

る。從つてラスキンの努力は其の著述の方面に於いても可なり激しいものがあつた。よりよき所の思想を盛るにはより莊重なる文章を必要とする、ラスキンは此の書物の文體に就いては Osborne Gordon の勸めによつて Richard Hooker の風を倣つた

『私はいつも稱讃を以つて最後に讀んだ本を模倣する癖が幾分あつた。併し其は（Hooker の著）論證の目的には（然も私自身の主題は自分の考へによれば誰にも論破せられぬ樣に論證されなければならないので）Hooker の英語と云ふものは現在ある內で最も完全なる模範の樣に思へた。兎に角自分は其の當時私の知つてゐた事を如何にして最もよく表現するかに努力を拂ひ、從つて出來る丈け多くの思想を一句一行の中に盛り、最高の正確と調子とを與へしめ得る言葉を撰ぶ迄は一行の文句だに手離さなかつた。

『斯くして最後の一行が終つた時、私は今迄以來初めて本當に疲勞したのを覺へた……』

從つて此の點に於いて第二卷は第一卷に對して著しい相違を示す

『其處には（即第一卷の事）血氣の氣質が氣障な、喧騷を極めた、氣短かな、半ば無遠慮な、半ば人氣取り的の貌になつて到る處に現はれてゐる。是は恐らく私が其を執筆してゐた當時の焦思からは豫期せらる可きものであつた。今や私は今度はよりよきものを作り出す爲めに、眞面目な、靜肅な、熱誠のある、單純な態度を現はす爲めに更に試みつゝある。』

併し第二卷に於いてラスキンが用ひた措辭は爲めに單純の美を離れて Mannerism に墮した傾のあるを指摘せらるる。E. T. Cook は次の如く云ふ

『第二卷は通貫して堂々たる文辭に結合せる高尙なる思想を包含する。其は選集の諸本に於ける寵兒となれる幾多の文章を持つてゐる、殆ど一つの途切なく其は威嚴の調子をとゞめてゐる。併し恐らくはラスキン自身の評決が主張せらるべきであらう、即ち第二卷の文體は極めて自己の力を識り過ぎてゐて、一つの必然的發展たるよりは寧ろ作爲的試みを想はせるものである。故に彼は云ふ「其は自分の本當の文體ではなかつた」と』

然も其の內容の相違に到つては、一八四四年以來のラスキンを知り殊に一八四五年の旅行がラスキンにとつて何んたるやを解する者の容易に想到しうる所であらう。

『感激の連續は各卷の結論の中に反射されてゐる。第一卷は「タアナアの力强き精神の各努力をして讃歌並びに豫言たらしめ、神性に對する禮拜、人類に對する啓示たらしめる」可くタアナアへの歸服を說くを以つて終つてゐる。第二卷は「動くに連れてより輝しやかに搖動する、彼等の白き額に輝ける光焰、搖蕩せる海に映ゆる數多き太陽の煌光の如く、彼等の紫翼より流れ出づる光耀を有し、交樂のひまに、限りなき深遠を充ち亙り、天國の星の岸邊より來る、喇叭吹奏の餘音と、ソォルテェリやシムバルの應奏とに耳を傾しげつゝある、かのアリジェリコが天使の一群」を賞め讃ふ頌歌を以つて終る』

此の第二卷の目的に就いてはラスキン自から其の二つを指示してゐる

『私は每日益々より高く燃えつゝある感情を以つて「近世畫家論」の第二卷を書いて行くに當り、懷ける目的と云ふよりは寧ろ明瞭なる二つの本能を滿足させたいと思つてゐた。第一は

生物のあらゆる幸福なる狀態を經て存在しうる事を今や認めた、其の美の性質の內容と、下つては當然其處に生み出された、最も緻密な詳細と仕上げられたる物質的構成とに就いて先づ私自身に說明し次いで他の人々に其を指示する事にあつた。第二は未だ英吉利の公衆に知られてゐなかつた美術の二派即ちフロオレンスに於けるアンジェリコとヴェニスに於けるチントレットとの力を說明し例證する事であつた』

其のラスキンが意圖した所の所期の目的はラスキンによれば充分に果されなかつた

『此の本が二つの方面に於いてその各々の目的を何程果し得たかその程度に就いて自分は知らないし又推測する事は出來ない。其は一般にその美しい行文の爲めにのみ讀まれてゐて美に關するその理論は殆ど注意を受けてゐない。チントレットに對する其の稱讃はナショナルギャレリイに彼のよき作品を購入せしめる事に至らなかつた。併し私は以太利に於ける Arundel Society の有益なる事業と、更に今日では非常に貴重な十四世紀の宗教畫の一連とを得る事によつて得た國民的蒐集の擴張とを導き出した運動に可なり與つた所あるといふ考を――恐らくは空な滿足ではあらうが――己に許してゐるのである。』

併しラスキンの著書は明かに其時代の趣味を轉ぜしむるに於いて力があつた、其は一般の風向をして文藝復興期以前の畫家に投ぜしめ、ナショナル・ギャレリをして上記ラスキンの所言の如く多くの初期の伊太利繪畫を購入せしめた。（ラスキンの本來の目的たるチントレットに關しては一八九〇年 Origin of Milky Way が初めて National Gallery に購入せられた。Arundel Society は一八四九年設立され、一八九七年解散したがラスキンは最初から其の評議會の會員であり此の協會の第一の趣意書は「近世畫家論」第二卷の文章の反響其のものと考へられてゐる更にチントレットに對するラスキンの關係に就いては、前者が其の知的、技術的方面に於いてタアナアに近似せる事と彼の英吉利に於ける名聲が誠にラスキンの努力に負ふ所大なりしは普ねく認めらるゝ所である。

「近世畫家論」の中心目的であり又ラスキンの敎理體系の中心でもある彼の美に關する敎義は E. T. Cook のラスキン傳第一卷第九章第三節に明確と簡單とを以つて紹介せられてゐる。ラスキンに從へば美は『一つの尊貴なる精神が創造し、同似の或は等しき尊貴を有せる他の精神によつて觀察され、感得さるゝもの』であり、其は又『神性の屬性の特徵たるべき。物象の有する、ある外界的資質と生命を有せるものに巧みに適應せる顯現とに存す』るものである。『美は宇宙の創造的精神の表現』にして其は『一つの純にして正しく公明なる心情』によつて感せらるゝのであり又推理的能力は『人類の精神的生活の必然の一要素たる、岩、浪、草木の如き、より低きあらゆる自然が人類の心情に訴ふる所』をよりよく理解しうる力にして又人類の有する此上なき特權である。

斯の如き美の解說は或は非難せらるゝ時あるも其自體に於いては極めて堂々たる敎理にして美の觀念を明瞭ならしめたるものと解せらるゝ。

『是等の「近世畫家論」の前卷は其の時代に於いて既に多大なる貢獻をなしたがなほ美術と趣味の高き理想を作らんとする點に於いて永遠の意義を有するものである。美の解說であり創造である美術は氣晴らしではない。又娛樂でも

ない……美術が之れ以上のものであるとは、美術が喜樂を與へざるが爲めではない、反對に、其が喜樂を與へざれば美術ではない、併し最高の職能として美術が訴へんとする所の喜樂なるものが單なる感覺的快樂に非ざるが故に美術は單なる娛樂氣晴らし以上のものとなるのである。』誠にラスキンは美術に對する理想と共に美術家に對する理想を建設した。彼は美術家の責務は說敎者のそれである事を示し美術は社會の尊崇に値するが故に美術家自からの自尊を說いた。かくして『かゝる高き理想はより力强く、「より成熟せる判斷力とより大なる謙讓」とを示せる第二卷は、山川の激湍岩を嚙んで流るゝの奔流に比せらるゝ第一卷に對しては洋々たる大河の莊重なる水深と水嵩とに準ふ可く、其の唱ふ所の美の解說と文辭の美麗とは「吾人に向つて翼を與へ、天國に至る新しき入口を開かしめ、」其の所論と殊にその熱誠とはそを當時に於ける珍らしき特徵たらしめ批評家をして「商業主義、功利主義の此の時代に於いて愛を以つて自然を語るをうる者、唯物的傾向に對して精神的存在を敢然と擁護しうる者に相逢ふの稀なる懌び」を感ぜしめた。故に第二卷は少數の非難を除けば(其の主たるものとしてはAthenæumとDaily Newsの兩評論)大體に於いて當時の有力なる多くの評論雜誌によつて其の價値を充分に認められたのである。

「近世畫家論」第二卷は其の第一卷第三版と殆ど同時に出版せられた爲め各種の評論雜誌によつて兩者を比較して批評された。其の大體の傾向は殊に第二卷に對する稱讃にあつた。其の

三

『近世畫家論』第二卷の執筆はラスキンをして從來經驗した事のない極度の疲勞に陷らしめた。斯くして其書が未だ公刊せられざるに先立つて彼は保養の爲めに又々兩親と共に大陸に旅立つたのである。

此旅行は『近世畫家論』第二卷の材料を得た各地に於いてラスキンの新しき發見を兩親に語り示す爲めであつた、が其際に於いてはラスキンと彼の父との美術上の見解が必ずしも合致せざるを示し中には可成氣まづい感情を起さしめる事があつた。父はラスキンが詩作を放棄したのみならず、舊來のProut或ひはRobertsの風の繪を描かずして建築物や其他の部分的寫生を集むるに汲々たるを不滿に感じ其の感情を示したがラスキンは頑强にその所信を進めて憚らなかつた。併し此旅行もChamouniに到着するに及んで一同は皆愉快なる日を送くる事が出來、殊にラスキンは常の如く、樹林、岩石、溪流の間に、或は雲霧、山嶽の空氣の中に歡喜に充ちた生活を送るを得た。斯くして此年の旅行はTroyesを最後として終つた。

一八四六年の旅行に於ける特色はラスキンの注意が今や確然と建築美術の方面に轉じた事である。『此年の彼の大陸旅行の日記は風景や畫面的効果を持つた記錄あると共に、初めて、彩色ガラス窓や彫刻や建築等に就いての覺書が可なり集つてゐるのは確である。前者に關するものも其處に見出しうるし又此時彼は『近世畫家論』第一卷の第三版改訂を終へ樣としてゐた事も記憶されねばならぬ、故に此版には一八四六年の日誌からの拔萃が附加されてゐる。然かし彼の日記に現はれた新しい特徵は著者が建築の細部研究に沒頭してゐると云ふ事である。ヴェニス

に於て彼は既に建築の詳細なる測量に忙しかつたし又最近に出版されたWillisの劃期的著作、『中世紀建築論』の多くの頁に註釋を加へもした又更にWoodの『一建築家の手紙』をも讀んでゐた。彼が後に『七燈』の中に開陳せる諸論點は既に彼の思想上に生じつゝあつたのである……『斯くの如く四六年の旅行には、ラスキンは以前花や岩石の研究に沒頭せるが如くに熱心に建築の斷面や刳形の研究に沒入し嘗て空や山嶽の寫生を爲した如くに扉や窓を畫くに忙しかつた。

是等の建築美術に關して集められたる材料は必ずしも『建築の七燈』を現はす可き目的を以て爲されたのではない。其序文に云へるが如く寧ろ『近世畫家論』第三卷の材料として集められたるの觀がある、一八四七年より翌四八年に亙る二年間はラスキンの文筆的作品に乏しい時代である、從つて是等の材料が一八四九年の『七燈』を形成するに到つたにせよ、其出版までに二ヶ月の歳月が經過したのである。

然からば繪畫藝術より俄かに建築藝術に轉じたるラスキンの態度は如何に說明するか。古代建築に對するラスキンの興味は決して新しく起つたものではない。既に吾々は彼が幼少時英國諸地の壓遊に際して美術趣味に豐富なる彼の父に導かれて古寺院城砦貴族の邸宅を訪れた事を述べた、又幼時組立玩具が建築上の興味を惹き起して愛重せられた事も觀察したし大陸旅行中大建築のスケッチに示さるゝ彼の興趣も乏しくはない、更にオクスフォード時代の作品として彼の『建築の詩』(Poetry of Architecture)を擧げる事が出來る、併し是等の時代のラスキンの建築美術觀は既に述べられた通り、後年の片鱗を示すことあるにもせよ、幼稚なものであつたに違ひない。單に壯麗宏大に對する子供らしき驚異或ひは又彼自身の言葉の如く古代建築に現はれたる時代稚移の偲に詩趣を感じたかに過ぎない。Poetry of Architectureは其副題の示す如く建築と國民性との關係であるがラスキンは少くとも大自然の風景の一部として建築を眺めてゐたのでは無からうか。美に對する精練され又敎養ある知識なく唯實用の爲めに建てられた農民の茅舍が其周圍に限りなき巧みなる調和にあるのは其處に謙讓なる人間生活と自然との階調が認められる爲めである。此場合に於ける農民の小舍山間の小亭は、草木樹林岩壁山岳河川と同じく自然風景を飾る所の一部分である、從つて「建築の詩」に於てラスキンは既に實用にのみ限られたる建築を排し美的要素精神的實質の附加せらるゝ必要を說いてはゐるが未だ建築に於ける人間生活の尊貴の表現を認める程には彼の人間生活の知識が進んではゐなかつた。何故に農民の茅舍が大自然と協調の美眞を示すか、彼には示すものと感ぜられなが其間の交感を强く語るにはなほ大なる敎養を必要とする。自然界の美と眞とより轉じて人間生活を見その藝術的生活の尊貴を認めるに到つた動機は一八四四年の大陸旅行（拙稿本誌第十七卷第六號二十二節後半參照）にあつた、一八四五年の旅行は其結果に外ならぬ、此行に於てラスキンは既に述べた如く人間藝術の三大部門に關する原理に動かすべからざる知識を把んだ。繪畫に並せて建築に關する知識觀察が一八四五年の筆に上つてゐる所少くない、併し一八四三年の著作がタアナアを中心として論じた自然風景畫家の責務――「眞」の確認――にあつた以上一八四五年の注意は先づ主としてフラ・アンヂエリコ、チントレットの作品に投ぜられた、其は彼が彼等の作品より新

しく認め得た美の教義を說き、人間生活の尊貴に論及するものであつた、この最後の點からして一八四六年「近世畫家論」第二卷を公にしてヴェネチアン・ペインタアズに對する一論に其の責務を果せるラスキンの才能が藝術の他の部門即ち建築藝術に投ぜられるに至つたのは決して不思議ではない。こゝにラスキンの特殊的性質として考へらるゝ限り無く偉大なる感受性が存在する。この感受性の偉大にして激烈なるを理解する事なくてはラスキンの思想並びに著述家的經歷を連續して理解する事は出來ない。

併し少くとも「近世畫家論」第二卷で美の哲學を論じアンヂェリコの描ける天使の一群に頌歌を捧げたるラスキンが直ちに建築論に轉じて行つた事には尙ほ他の理由を必要とする、そはラスキン自身の言葉が最もよく說明する所であつて、「近世畫家論」の全計畫は第二卷を以つて打ち切られたわけではない。其間の消息は「建築の七燈」序文中に語られてゐる、「七燈」の材料は「近世畫家論」第三卷の爲めに用意せられたものであるが其が獨立の論文として現はれるに至つた理由は古代美術が當時遭遇した危險をラスキンが痛切に感じた爲めである。伊太利美術が何の愛惜の念なく破壞せられ放棄せられ醜惡愚劣に改築せらるゝを見るはラスキンの耐えうる所でなかつた。一八四五年の旅行中に此感情は記錄せられてゐる。ヂョットの壁畫の荒廢を歎じ大規模なる模寫に企圖せる事はその感情の發露である。同年の書簡中に次の如き言葉がある。

I do believe that I shall live to see the ruin of everything good and great in the world.... God preserves us and give us leave to paint pictures and builds churches in heaven that shan't want repairs.

彼は五十年生れし事の遲きを歎げいてゐる。誠に「修復者」や「革命家」の行ふ破壞の作業が完成する以前にあらゆる古代建築の研究を纒めておく必要があつた。ラスキンが一方の側よりドローイングに腐心せる間に其の建築の他側は漸次打毀されて行つた。かゝる事情よりラスキンは遂に「近世畫家論」の結論を書く以前に於て先づ速急を要する仕事を感じた。かく方向の轉ぜるを認めたるが故にラスキンは「七燈」の序文に「近世畫家論」の結論出版の遲延する原因は著者の怠慢に基くに非ずと辯解してゐる。斯くの如き仕事は勿論建築の技術的研究に止まるのでは無かつた。直接自己の觀察を通して得た研究には經驗ある專門の建築家に對しても貴重なる價値を有するものあるであらう。然かし其を基礎として構成する見解に關しては著者と問題との關係上屢々僭越を感ぜしむるものがある。ラスキンは此非難を豫知した故に次の如く云ふ。

"There are, however, cases in which men feel too keenly to be silent, and perhaps too strongly to be wrong; I have been forced into this impertinence; and have suffered too much from destruction or neglect of the architecture I have best loved, and from the erection of that which I cannot love" (Preface to Seven Lamps)

斯くの如き立場に立つラスキンが社會生活の觀察に入る道は既に今一歩の所である。蓋し今日の社會に於いて古代美術が破壞荒廢に委ねられてゐる事と其の美術が嘗て有せし社會的意義との間にある相違は兩社會狀態の反映を示すに外ならぬからである。從つて先づラスキンをし

て社會批評に轉せしめたるはこの「建築の七燈」の中に說かれたる敎義であると云ふエフ・ハリソンの說は當れりとしなければならない。

斯くして轉じたるラスキンはヴェニス建築に關する速急の研究が左程多くの年月を要する事なくして完結するものと考へてゐたらしく又他方に於いては「近世畫家論」も今一卷を以つて終りうるものと考へてゐたらしい。併しラスキンの性質は凝り性であり熱狂的熱中的であつた、故に一度轉じたる研究の新方面は一八五六年「近世畫家論」第三卷の現はれるまでに其間七年を費し上記の建築に關する名著作は五篇を算ふるに至つた。

併し吾人は一八四六年以後四八年に至るまでの二年間に就いて先づ語る必要がある。四六年は主として建築の研究に費され又大英博物館内に於いて研究した。併し一八四六年より七、八年に亙つては文筆的勞作比較的に尠く病氣に惱む所多く且つは家庭上の出來事も彼の著述的生活に著しき發展を許さなかつた。（未完）

ジョン・スチュアート・ミルの功利主義に就て

宇佐美洵

一

吾人は功利主義を以て、人間行爲の善惡決定の標準は功利或は快樂なりとするカンバーランド以後英國に興りし倫理的主張を意味せんと欲す。

ジエレミー・ベンサムは屢〻功利主義の模範的代表者と云はれ（Albee: A History of English Utilitarianism, p. 165）恰もそが創始者の如くに思はる。（Rogers: English and American Philosophy since 1800, p. 52）又彼と最もよく比較さるべーレーが彼の唯一の倫理學書の序文に極めて明白にタッカーの非常なる影響を受けたるを記するに反し、彼は自ら常に功利理論の創設者の如く書錄する。實に彼の弟子 Bowring に依つて記せられし會話の中に、ベンサムは他人に負ひし唯一の恩惠がプリーストレーの著政府論に最大多數の最大幸福なる語の偶然使用されたる事實に深く印象を受けた一事のみであるかの如く云ふのである。（Albee: Ibid. pp. 165-165）。

乍併、功利主義はアルビーの指摘せる如く、ベンサムが諸書を著し、彼及びミル父子が公衆的快樂說より演繹して社會及び政府に對し彼等獨自の見解を大成する以前、既に本來の倫理說として大なる發展をなし來れるものであつた。（Albee: Ibid. Introduction xii）。遠くカムバーランド此後ヒューム、アブラハム・タッカー、ウイリヤム・ペーレー等を經てベンサムに至つた思想家の一系統である。

ホッブス以前に於ては一般に、人間意志の唯一可能なる內容は個人の利益或は害惡なりとされた。然るにそれ以後に至り、倫理行爲の標準は、吾人の同胞の利益の爲めの行爲の結果の純粹なる心理學的方法に求められた。道德性は獨り社會體の內のみに存在する。彼の爲め、而して彼のみの爲めなら個人は自己の禍福を知る。併し社會に於ては人間の行爲は他人に與ふる利害に依つて判斷さる。是れのみが倫理判斷の標準として是認される。（Windelband: A History of Philosophy, p. 512）。

リッチャード・カムバーランドは自然法を以て有ゆる道德及文明智識の基礎なりと主張する。